

お茶壺道中へのおもい

市民が主体となって作り上げてきた、お茶壺道中。かわつてこられた方々の思いをうかがいました。

お茶壺道中10周年を迎えて

お茶壺道中実行委員会
委員長 岩間公勇

私が「勝山城お茶蔵」に興味を持ったのは、14年前、静岡県のあるホテルで以前からお付き合いのあった辻村明東京大学名誉教授のイベントの懇親会の時でした。隣には古在由秀国立天文台長、前川誠郎元西洋美術館長など、普段の生活にはおよそ関係のない方々を前に自己紹介をしたことから始まります。大学教授という肩書を持つ方々が多かった席なので「都留文科大学がある都留市から・・・」と切り出した途端、見知らぬ方から「君、大学の名前で故郷を紹介するよりも、もっと違うものはないか。」と突っ込まれてしまいました。その時、知人が「勝山城お茶蔵に徳川將軍家のお茶・・・」と助け舟を出してくれて、その話題で懇親会の席上は、盛り上がった記憶があります。辻村先生の手元には、以前、市から「茶壺道中誌（都留市発刊）が送られていて、興味を持たれていたと後になってお聞きしました。自分の町の話であの方々があれだけ盛り上がったのかと思うと何か胸騒ぎが起りました。

当時、私は商工会青年部に属しており、他県の方々との交流もありました。「地域活性化」まちおこし」というフレーズは至る所で使われていました。しか

し、私は、その大多数が、掛け声だけで終わってしまうのを見てきました。失敗の原因を追究する前に次の事業に乗り出すといった繰り返しが行われ、成功事例の「ものまね」が横行していました。「勝山城お茶蔵」を核に何か出来ないかと、青年部の先輩と辻村先生と知人の県外者2名、総勢8名で「お茶壺道中研究会」を作り、その歴史からイベント性、方向性の勉強会を開きました。時には静岡まで

出向き研修会を重ねました。そのうちに、宇治市、京都市の調査が必要となり、平成11年度に市の補助金を受け、現地調査を行いました。この調査は非常に有益なものでした。まず、お茶壺道中研究の第1人者の若原英式さん、江戸幕府茶詰御用の第14代当主上林春松さん、宇治茶の第1人者である小山元治さんなどの日ごろ多忙な方々と長時間、面談する事で、これからの都留での事業展開に全面的な協力を約束していただきました。何よりも一番の収穫は、お会いした全ての方々が口々に、勝山城お茶蔵の価値を認めてくださった事でした。そして「お茶壺道中研究 予備調査と研究」と題した報告書を市に提出しました。そして遂に、平成12年10月22日「第1回お茶壺道中行列」が行われました。衣装・道具は京都市 茶壺保存会から全て借り受け、ミュージアム都留から谷村第一小学校まで行列が進みました。同日の午後には「第1回お茶壺道中シンポジウム」を文化会館で開催し、辻村先生の基調講演やパネルディスカッションが開かれました。これらの事業は、郷土史関係者、茶道関



塩尻市奈良井宿で茶席を設け、都留の極上熟成茶「瑞鶴」を紹介

係者、各種団体、市、商工会からの協力と市民からの協賛金で行われました。翌年から衣装・道具は、徐々に整備され、平成14年には、市へ提出した報告書の中で提言した「お茶壺道中ツアー」極上熟成茶再現計画」が実現しました。第1回お茶壺道中ツアーでは、宇治市での茶摘体験や上林さんに熟成茶再現計画の依頼と実際に茶壺への茶詰めを行いました。この年の秋、熟成茶再現が無事成功し、一般公募した茶名「瑞鶴」のご披露茶会を行いました。また「お茶壺道中研究会」から「お茶壺道中実行委員会」へと組織変えを行い、地元市民による活動へと移行しました。

お茶壺道中行列の最高責任者である「採茶使」役は一般公募によるものです。その年の春に開催される、お茶壺道中ツアーから10月最終日曜日に行われるお茶壺道中行列まで長期に及ぶものです。昨年新たに「採茶使会」を作るほどの組織となりました。茶道関係者には産業まつり会場での呈茶席開催のほか、平成18年から奈良井宿の一軒を借り「瑞鶴 茶席」を



お茶壺道中事業10周年記念事業として、開催されたシンポジウム

事が可能だと思えます。それには、多くの方の参加と協力をいただかなければなりません。これまでの協力に感謝するとともに、これからのご支援をお願いして10年の区切りとさせていただきます。

後世に残したい貴重な財産

玉川 三枝富久子

お茶壺道中の盛んであった、江戸時代には、甲州谷村に立ち寄り、茶壺を城主秋元氏に預け、夏の間、涼しい谷村の勝山城に格納することが江戸中期まで続いたようです。このような歴史を踏まえ、都留の古くからある文化を伝えるため、市内有志の方々やお茶に携わっておられる先生方によって、お茶壺道中行列が行われています。

八十八夜ごろ、摘み取られた茶葉を詰め、宇治の第14代当主 上林春松さんにより封印された茶壺を、10月に「口切りの儀」が行われ、抹茶になって「ずいずいずつころばし」の唄のとおり、お籠に揺られて採茶使を先陣に高尾町通りを谷村第一小学校まで行列のお練りが続きます。「瑞鶴」という熟成された、ここにしかない富士の靈氣を浴びたおいしいお茶をいただく事は、この上ない幸せを感じます。

お茶壺道中行列の事業を立ち上げた実行委員の方々、お茶の先生方のためまぬ

努力には、本当に頭が下がります。私たちは、この地に生まれ育った、次の世代の人たちに、この伝統文化の大事な財産を受け継いでもらわなければなりません。そのためには、頑張り続けて行ける環境を整えなければなりません。一服のお茶に秋の一日を満喫できる幸せに感謝いたします。

お茶壺道中の旅

小形山 井上明子

將軍御用のお茶は、宇治から谷村まで12日間で運んだそうです。1日の徒歩距離は40キロと聞いています。それを連日歩くわけですから、山あり谷あり、凸凹道あり、雨風の日もあつたでしょうし、大変な苦労があつたと推察します。そのような事に思いを馳せながらバス旅



悠久の時を超えて、お茶壺道中のルーツを追いかけてきました。

行を楽しんで参りました。お茶壺道中ツアーを実施して8回目だそうですですが、私はその内、4～5回参加しています。旅は例年通りお茶壺受け渡し式から始まります。都留市の採茶使から14代当主の上林春松さんへ空のお茶壺を受け渡し式で

す。茶師400年の名門である上林家は、中世のころから「天下」の名を得ていたそうですから、その伝統を自然に感じる威儀正しいものでした。また、今回の旅では、極楽浄土の宮殿と言われる「平等院」や荷社の総本社「伏見稲荷大社」も見学しました。お茶壺受け渡し式から神社仏閣の見学など、これほど多彩でありながらのんびりとゆつたりとした旅ができ、大変良い思い出になりました。

お茶壺道中ツアーに参加して

田原 酒井利光

3年前、新緑がさわやかな5月、茶摘みの最盛期とされる八十八夜の5月2日、第7代目採茶使として、お茶壺道中ツアー参加者の方々と京都を訪れました。このお茶壺道中ツアーは、この年5回目でしたが、今回初めて京都で行われている茶壺道中保存会が実施する第34回昭和新版お茶壺道中行列に、長野県奈良井宿、世界緑茶協会の方たちと参加することができました。5月2日、午前10時過ぎに建仁寺に到着しました。早速、行列参加者は時代衣装に着替えました。行列出発に先立ち、中国から茶を持ち帰ったとされる栄西（臨済宗建仁寺開祖 栄西禪師 ゆかりの建仁寺において御献茶、茶詰め式などの儀式を済ませ、お茶壺道中行列が発しました。境内にある栄西禪師の御影像に一礼し、古都、京のまちに繰り出す石畳の花見小路、茶屋の簾の奥から「都留は・・・お茶の産地ですか」の声が聞こえてきます。四条通りでは多くの観光客が詰めかけています。行列一行、総勢約60人が、堂々と都大路



京都のまちを堂々と練り歩く都留のお茶壺行列